☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第26号　2001年９月10日（月）
発行　歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
TEL/FAX 078-803-5565
URL http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/welcome.html
Mail:yfujita@lit.kobe-u.ac.jp

目　次

特集　シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」
特集にあたって…… 1
シンポジウムの記録　加藤宏文… 4
被災者・市民の心を伝える震災資料室へ　松本　誠… 6
シンポジウム参加者の感想文から…… 7
大阪歴科協７月例会で山陰・芸予の現状について報告と意見交換　佐賀　朝… 8
大阪歴科協７月例会に参加して　吉川　潤… 9
兵庫津研究会（第３回）のお知らせ…… 9
「火垂るの墓を歩く会」成功裏に終わる…10

――特集　シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」――

特集にあたって

「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」。この課題をめぐって、私たち歴史資料ネットワークは、これまでさまざまな形で市民、行政、研究機関、図書館・史料保存機関などとも連携しながら、そのあり方をともに考え、どう実践していくかということに取り組んできました。

実際、多くの市民や機関・団体の努力によって、震災について多様な形での記録化と保存・活用が実現しつつあります。ことに、県および被災10市10町が出資する（財）阪神・淡路大震災記念協会による、大規模な震災資料調査・収集の取り組みは、現代資料保存・活用の事例として、かつてない成果を生み出しつつあります。

その一方で、この記念協会による調査・収集資料が収められ、公開されることとなる阪神・淡路大震災メモリアルセンターについては、果たしてそれが、多くの市民や団体の善意によって提供された震災資料保存・活用の場として有効に機能するのか、あるいはそのプランにおいて予定されている他のさまざまな機能・役割についても、十分果たしうる施設となるのかどうか、多くの疑問や批判の声が寄せられています。

神戸市中央区の東部新都心に、第一期工事60億円、第二期工事も同程度の額を投じて建設される予定のこの施設は、本ニュース２頁から３頁かけて掲げた県作成資料にあるように、防災科学やヒューマンケアに関する研究機能、人材育成、国際的なネットワーク機能、および、震災に関わる資料の網羅的な調査・収集・保存・公開と、震災を忠実に再現した展示という、あまりに多くの機能・役割が予定されています。

（４頁につづく）

“史料ネットNews Letter”購読のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。
“News Letter”は年４回発行、年間郵送料500円にて受け付けています。
下記口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みいただくか、TEL、Mail等にて史料ネットセンターまでお申し込みください。
活動支援募金も受け付けています。

史料ネット郵便振替口座

名義　阪神大震災対策歴史学会連絡会　　口座番号　０１０９０－７－２３００９

（兵庫県作成資料より）

第一期工事はすでに着工されており2001年度中に完成予定、第二期工事もこの10月には着工予定ということであり、すでに内容的には固まった施設、言い換えれば批判してもあまり意味のない施設とも考えられます。

しかしながら、巨額の公費を投じて建設されるこの施設と、そこに込められている機能の重要性に鑑みれば、ここに到っても、なおその計画について議論し、意味を問うていかなければならないと、私たちは考えます。そこで、市民団体として震災資料保存や記録化に取り組む「震災・まちのアーカイブ」とも協力しながら、昨年10月と今年７月の２回にわたって、「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」というテーマのシンポジウムを開催してきました。本ニュースの前号でもお伝えしたとおり、去る７月８日（日）に長田区ピフレホールにおいて開催した第２回シンポも、約70人の参加を得て、活発な議論が展開されました。

その詳細については、本ニュース掲載の加藤宏文さんによるレポートにゆずりますが、議論のなかでも、現メモリアルセンタープランについてのさまざまな問題点や疑念があきらかとなってきました。震災のメモリアルという、まさに被災者をはじめとする市民を主体として、プランを検討しながら造っていくべき施設が、行政主導によって場所も建物も内容も、ごく短期間に決定されてしまうという経緯・事業手法。そこから派生する、計画内容の問題性。あるいは、上記のように、防災とヒューマンケアにかかる研究や人材育成、資料保存・公開（ライブラリー・アーカイブ）機能、震災に関わる展示施設という、関連性はあるとは言えそれぞれ別個の事業を、具体的な検討なしに最初から一つの施設に押し込めてしまっていることによる、施設機能・面積面での大きな疑問。また、そういったそれぞれの事業について検討している関係者・専門家の間ですら、どういう機能をどの程度のウェートをもって実現していくのかという、施設の具体像についてかならずしも共通理解がないままプランが進行しているという現実。

なかでも、震災資料の関連では、記念協会の資料調査・収集事業が大きな成果をあげており、また資料を提供している被災者や諸団体から大きな期待が寄せられているにもかかわらず、センター構想におけるライブラリー・アーカイブ部門は、現状ではそれにふさわしい位置付けがなされていないとしか考えられません。また展示部門は、専任の学芸員を置く本格的な博物館施設ではなく、展示の中心的部分は業者委託で作成され定期的な入れ替えなどは予定されていないということです。内容的にも、巨大なビルの屋内に震災被災状況をバーチャル風にリアルに再現したり、第二期工事にいたっては人工的な自然空間を作っていやしの場とするという理解に苦しむ内容となっています。

果たしてこういうプランの進め方でよいのか、実現する施設が、十分その機能を果たせるのか。そういった問題提起をあらためて行なうため、今回のニュースにおいて、シンポジウムの内容紹介を中心とした特集を組みました。「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」、この問題について、多くの皆さんに考え、声をあげていただくきっかけになれば幸いです。　（文責・編集部）

「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」シンポジウムの記録

加藤宏文

2001年（平成13）７月８日（日）、シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか－メモリアルセンターの問題を考える－」が、歴史資料ネットワーク主催の下、神戸市立新長田勤労市民センター別館ピプレホールにて行われた。今回のシンポジウムは、2000年10月15日に行われた同タイトルのシンポに続くものとして、企画された。

当日は、芝村篤樹氏（桃山学院大学）をシンポジウム司会者として、室崎益輝氏（神戸大学都市安全研究センター）、笠原一人氏（京都工芸繊維大学）、菅祥明氏（震災・まちのアーカイブ）、山辺昌彦氏（立命館大学国際平和ミュージアム）による各報告、県のメモリアルセンター整備室・高見氏によるメモリアルセンターの構想と現在の状況についての説明、そして討論というかたちで進行がなされた。

室崎氏は、氏のイメージするメモリアルセン

ターのあるべき姿を総体的に示した。氏は、震災の体験を伝えるメモリアルセンターは、融合的ネットワーク的施設であり、たえず震災についての意味づけを行っていく非完結・継続型の施設であり、テーマの明確化・共有化、マンパワーを生かす運営のシステムとフロー、市民の広範囲な被災地全体の被災体験を伝えていくような文化運動が必要だと述べた。

笠原氏は、施設を設定・計画するにあたって、震災をどう伝えるかという今日のテーマや問題意識を生かした手続きが、まったく考慮されていない、とられていないのが問題だとし、第二期計画・設計者選定・敷地選定について非公開性等の問題点についてさきのシンポにつづいて再論し、震災を伝えていくために、震災資料館的なものを分散させて核被災地域の核につくり、震災を考える・まちづくりの核にし、地域の資料を現地主義的に収集・保存してデータをネットワークで結ぶのがよいと述べた。さらに「まち」につくられる施設の成功例・失敗例についてスライドを交えて紹介された。

菅氏は、氏自身の震災体験を踏まえて人とまちの関係について、震災・まちのアーカイブでの活動を踏まえて震災に関する様々な資料とその資料が持つ可能性について論じられた。

氏は自身の震災体験とその意味を考えていったプロセスについて語られ、人にとってもまちにとっても震災の記憶を閉め出すのではなくその体験の意味を考えていくということがこれからはますます大切になってゆくと述べられた。また、資料の可能性について、資料が伝えるものは震災の中での人間の営み、喜怒哀楽、復旧復興の過程などでありそれらを後々まで伝えることが出来るのは、震災について記した資料であり、様々な記録である。ひととまちにとって震災の意味を考える、その過程で重要な足がかりになるのが、資料であり、資料が被災した人間とまちを結びつけると考えるようになったと述べられた。

山辺氏は、「テーマ性の強い博物館のあり方について」と題して報告された。従来のテーマ性博物館（的施設）は、博物館としての諸機能が充分に確立していない点が問題であるとされ、メモリアルセンターを含め、まず博物館として性格づけ、博物館の諸機能を確立することが必要であると説かれた。具体的には調査・研究、資料の収集・整理・保存・活用、普及教育活動、展示といった諸機能であり、特別展・企画展の開催や研究報告、物資料中心の展示、資料の閲覧・複写等サービスなどを可能とすることが重要であると述べられた。さらに博物館の発展を保障する体制として、専門職の体制の確立、市民を含むネットワークの機能などについて論じられた。

準備室からのメモリアルセンターの構想、現在に至る経緯についての説明の後、討論に入った。司会の芝村氏から、震災記念協会を中心とし震災以来５年余りにわたって続けられた資料収集事業で集められた７万点近い資料について説明があり、この資料をいかに生かすか、資料を託された人の思いをいかに生かすか、という点が焦点であり、メモリアルがどうあるべきかということと関わる、とまとめられた。

その後、パネラーおよびフロアから出された論点は、以下の通りである。集められた資料がどう扱われるのかわからず永久に死蔵されるかもしれないとの懸念、資料の検証は、急速に一括にやるべきではなく地域ごとに分散型で保管し各避難所、仮設からのモノを時間をかけてきちんと検証していくべきとの意見、住民が望むのは自分たちのまちでの防災のために役立つ展示である、震災については具体的なものを目の前にしながら語ることが重要である、メモリアルセンターという名称のイメージと資料提供の際の「思い」との関係、被災者の慰霊のあり方、震災資料という現代の資料をどう展示したり公開していくかについてなどである。また、メモリアルセンター問題に直接関わることとして、現段階にいたって委員間で相互に思い描くコンセプトが異なること、事前準備の不足への懸念の表明や、資料をどう展示するか、資料の閲覧・利用の体制をいかに整えるか、分散型と中央型の役割、情報検索のシステム、研究員の体制などについての議論がなされた。

以上、シンポジウム当日の簡単な記録である。最後に筆者の個人的感想を少しだけ述べて筆を置こう。歴史資料を遺した、遺そうとした人々の「思い」、思想に迫る・答えるとはどういう事か。また、どのような歴史研究になるであろうか。現代、まだ現在と言って良い時期について歴史的にどのように取り扱うのか。これらの問いについて今は一応の答えさえも用意できないが、震災資料への関わり方を間近にし、問いがより身近になってきたような気がする。

震災で最も被害の大きかった地域の一つである長田区で開催されたことの意義は大きい。フロアから発言された方は、避難所の資料を学校を中心とした地域コミュニティで保存すること

に携わっている方や震災の語り部や聞き取りをされている方など、震災に向き合い、資料と身近に関わっておられる方であった。我々は地域での取り組みについていろいろ知ることになったし、さらに今回のシンポジウムは震災資料に関わっていく者相互の交流にとって、ちょっとしたきっかけとなったのではないか。

メモリアルセンターを住民のものとしてどうとらえ返していくか。このことについて小さくない手がかりが出されていたように思う。震災資料をどう生かすかということの議論は始まったばかりと言って良い状況にある。今回大きく議論が進展したが、資料収集は検証の過程と平行して行われるべきである。今後は震災資料をどう使って何を発信するかについての成果の蓄積も議論を進めるために重要であると思われる。

（かとうひろふみ、大阪歴史学会）

被災者・市民の心を伝える震災資料館へ

松本　誠

兵庫県が神戸東部新都心ＨＡＴ神戸に建設中の仮称「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」が、震災資料の収集・保存活動に携わっている専門家グループや市民活動団体などから、すこぶる評判が悪いのは何故だろうか？ こうした人々から評判の悪いセンターは、果して震災の体験と教訓を未来に伝える拠点として、機能するのだろうか？ 素人ながら、震災体験をどう伝えていくかについて６年半考えつづけてきた一人として、看過できない。

阪神・淡路大震災とその復興過程は、人類が初めて体験した都市直下型大地震であり、20世紀末の歴史的な大転換期に遭遇した新しい社会システムの変化を加速させたプロセスであるといえる。だとすれば、その記録を収集・展示し、日本と世界の人々に新しい時代への課題を発信するメモリアルセンターは、被災者・市民の体験と思いを被災者・市民自らが提示していくものでなければならない。

メモリアルセンター構想は当初、そうした施設のあり方をじっくり熟成させて、被災地の総意を集約したものをめざそうとした痕跡はある。しかし、国の財政配分の都合で突然予算がつき、しかも単年度事業で一気に完成させる仕組みに組み込まれた段階から、被災地の象徴づくりの事業は一変し、「金がついたからとにかく建設…」というハコモノづくりに転化してしまった。時間に追われた事業は市民の意向を反映して、市民参画のもとにすすめることから程遠い存在に堕してしまった。

震災資料館は、もちろん中身が大事であるが、それ以前に「参画と協働」を掲げる自治体が行政主導で突っ走ってしまったところに、不幸と不評の根源があるとはいえないか。

震災の余燼がまだ立ちのぼっているころから、震災資料の救出、収集は市民や専門家のボランティア活動から始まった。行政組織が資料収集の必要性に気づき、動きだしたのはずいぶん時間が経ってからだった。史料ネットをはじめ歴史資料に関心を持つ多くの専門家やボランティアは当時、困難な中で震災資料の収集保存と組織づくりを訴えてきたが、莫大な予算を握る行政組織の腰は重かった。

行政組織が平常時の体制を取り戻したころから、“官主導”の資料センターや収集事業が始まり、民間の声が通りにくくなる。震災資料の分野だけでなく、被災者の生活再建や住まいのサポートなどの復興のさまざまな分野で、市民グループやＮＧＯ、ＮＰＯが嘆いてきたのと同じ光景が、この分野でも繰り広げられているといえる。

メモリアルセンターの２期計画見直しと新しい計画づくりの過程に、こうした反省が生かされるかどうかが、「参画と協働」を第一の柱に掲げる新しい県政の試金石にもなる。否、市民の側の主体的な取り組みが求められる所以である。

もう一つの課題は、フォーラムでも指摘された「膨大な収集資料の扱い」である。

震災資料館は、きれいに展示された空間をながめたり、テーマパーク的な楽しさを提供することが第一の役割とは思えない。被災地の各地に点在する資料の集積を案内したり、資料の中に分け入って自ら震災の実像と復興の足どりと困難な状況を体得できる機能も大事だと思う。資料館を訪れる人々を単なる「お客さん」とせ

ず、震災と復興体験を生かしていく「新しい市民社会の担い手」として位置づける発想が欲しい。

兵庫県と被災地が後世末長く、防災と安全・安心のまちづくり、支え合う社会のあり方を世界に発信していく“震災の語り部”をめざすなら、軽佻浮薄なテーマパーク的発想を脱して、息の長い震災資料の収集と分析、発信をつづけていく拠点としてのセンターとしたい。

何よりも必要なのは、とりあえず収集した資料をだれでもいつでも閲覧できるオープンで巨大な収蔵庫と、民間のさまざまな専門家や市民が活動の拠点とできる空間である。資料の収集保存と管理運営を官主導から民主導に切り換えることによって、新しい資料館のコンセプトが生まれるのではないか。

(まつもとまこと、
神戸新聞編集局調査研究資料室長)

シンポジウム参加者の感想文から

（当日の参加感想文の一部をご紹介します）

○笠原先生の設計者、敷地の選定方法については賛同したい。しかし地域ごとの分散型の案については、大震災を全体としてどうとらえるか、また体系的に研究調査するうえでは無理があると思えた。収集した資料の利用方法に議論が集中したが、メモリアルセンターはそれだけのものではないはず。経験をどう生かし将来への教訓とするのかが重要であるとすれば、もっと多角的な議論をすべきと思う。

展示内容や方法についても具体的な討議が欲しい。パネラー間の討議形式の時間も設定されればいいのではないかと感じた。

○５人のスピーカーの方々の想いがそれぞれに伝わってきた。このようなシンポもよいが、被災地の人たちがメモリアルセンターに対してどのように考えているか、想っているかアンケートをとったり地域会議等を開いてみてはどうかと思う。

○市民、被災者のメモリアルへの関心が薄い。そこでの白熱した議論に何があるのか。まず、多くの市民・被災者の参加、その働きかけが不十分なのでは。市民不在、被災者不在は、メモリアルセンターの建築だけでなく、行政主導のすべてに見られるのでは。

兵庫県のパンフの「人類史上はじめて」がどこにかかるのか判然としないことに見られるように、ことばだけ（美辞麗句）が上滑りしている印象はぬぐえず、笠原氏の指摘が不十分とはいえ、説得力を持っている。

○「非完結型の施設に」という室崎先生のご意見について。極論すれば、出来事に対して何らかのメッセージ、テーマを付与することは、「風化」を促進する働きがあります。勇気をもって、「阪神・淡路大震災とは何であったか」を確定せず、オープンにし続けること－その作業のための場として、メモリアルセンターに機能して欲しいと感じます。

「震災と人との出会いがデザインされていない」という笠原先生のご意見について。たしかに「場所」はキーになると感じます。私たち語り部の取り組みでも、メリケン波止場、モニュメント、メンバーの自宅跡・周辺など、少しでも当の出来事の場所性を帯びたところを訪ねています。さらに付け加えれば、それらの場所の間を聞き手の生徒さんらとともに歩くことも、大切にしています。（中略）同じ場所で（できれば同じ時間に）同じ身体動作を反復すること－“ショアー”じゃないですが、こうした体験が時空を超えて、人をオリジナルな出来事に直面させると考えるからです。そのための「場所」を大切にしてほしいと思います。

○メモリアルをめぐる議論が広がっていくために、良い企画だった。私どもは長田区の避難所資料をこれから10年先、20年先どのように展示していくか、についてヒントを得たい気持ちです。広島市の平和公園が被爆直下の街に造られたように、メモリアルセンターも長田の街にふさわしいと思います。

○あの時の被災の傷み（経済、心、身体）を人々と共通の傷みとしてメモリアルされることはすばらしいと思う。そして子供たちへ受け継がれる記憶となるような「阪神・淡路大震災の歴史」を出版してほしいと思う。

北京の抗日博物館を昨年高校生と一緒に修学旅行で訪れた。一番印象的だったのは、亡くなった人たちの名前が立派な大理石に刻まれていたことだった。生徒が思わず指でなぞっていた。なくなった人の名前を刻んだ立派なメモリアルを希望する。

○メモリアルはあまりに多様な業務を詰め込んだまま見切り発車という感じですが、せめて内

容の変更（展示、収蔵物、職員含めて）には、柔軟に対応できるようにしておいて欲しいというのが、正直な感想です。

室崎氏の話のなかに「100年後も企画展示が行なわれるように…」との言葉がありましたが、それができるだけの資料の収集とその整理は不可欠です。最も“息の長い”言葉を発するものは－？というと、それはやはり文芸、音楽、美術といった芸術ではないかと思うのですが、そういうものは「美術館や文学館」と考えずに、それらも資料のひとつと考えていただけないでしょうか。美術館は“美術史”の流れに沿ったものを収蔵せざるを得ない、震災は歴史的出来事だからと、これまでなら資料のごくごく一部が歴史博物館に収められておしまいで、現時点でならたくさん存在している震災文芸、音楽、美術は散逸して消えていく運命にあります。同じＨＡＴに新美術館もできますが、学芸員が企画に割ける労力と時間には限界があるでしょう。連携の体制はあるのでしょうか？「そんなことまでメモリアルセンターで」と思われるかもしれませんが、ネットワークは必要だと思います。

大阪歴科協７月例会で山陰・芸予の現状について報告と意見交換

佐賀　朝

2001年（平成13）７月15日（日）、「被災史料救出活動の新展開－山陰・安芸灘からの報告－」と題して、大阪歴史科学協議会の７月例会が、大阪教育大学で開かれました。

山陰史料ネットの小林准士さんによる「鳥取県西部地震と山陰史料ネットの活動」、愛媛資料ネットの寺内浩さんによる「芸予地震と愛媛資料ネットの活動」の二つの報告のほか、広島史料ネットの長谷川博史さん、資料ネットやまぐちの森下徹さんからもコメントが行われ、活発な討論が行われました。

まず小林さんの報告では、昨年10月の地震発生以来の活動経過の詳細とそこでの方針のあり方（行政との関係や救出対象の設定の仕方など）を検証した上で、救出された史料の概要と特徴（畿内を念頭に置くと、比較的小規模な史料群が多いと見られるなど）や今後の課題（救出史料、特に襖の処置が最大の課題、また地元住民への「説明会」など）についても述べられました。山陰の活動の密度の高さと充実ぶりには、あらためて感服させられました。

次に寺内さんの報告は、ネットの発足経過や地元の歴史団体、自治体、大学との連携のあり方について説明した上で、５月初めから松山市・今治市を中心に本格化した救出活動の状況と救出史料の内容についての詳しい紹介がありました。愛媛の活動については、おそらく関西では初めての本格的な活動紹介になったと言えるでしょう。

また長谷川さんからは、呉市での澤原家でのレスキューなど活動の概要のほか、マスコミへの対応の問題や、行政・地元研究者・大学などが連携していく上での課題などについてコメントがありました。

森下さんからは、７月７日に実施された東和町での調査について紹介があり、予想外の被害が確認されたので、今後、ネットとして活動を進めていきたいとの表明がありました。

休み時間には、京都造形芸術大学歴史遺産研究センターの尾立和則さんから、飛び入りで、「被災資料の救援活動に使う工具一式」について、実物を展示しての解説があり、いざという時にはぜひ活用してほしい、またセンターに連絡してくれれば、積極的に協力しますとの心強い呼びかけもありました。

討論では、阪神の史料ネットの藤田明良事務局長も参加して、活発な質疑が行われ、それぞれの地域での状況についての質問・回答が行われたほか、各地での行政との関係のあり方、活動成果や救出史料の市民へのＰＲの方法（愛媛では商店街の空き店舗を利用した史料展示を構想中など）、民具や大量に救出された襖類の今後の処置などなど、をめぐって状況の紹介・分析と意見交換が行われました。

とりわけ、どの報告者からも異口同音に、震災後の活動を通して、地域の史料を守るためには日常的な活動とそれを支える関係者の連携が大事であることが強調され、そうした各地域の活動を全国的に連携させるネットワークがつくられるべきだ、という意見が出されたことは、

たいへん印象的でした。阪神の史料ネットでは、現在進めている組織改革の議論の中で、災害から史料を守るための全国的な連絡組織としての機能を持つことが課題として浮上していますが、各被災地の最前線で活動している皆さんからの強い要望に接して、そうした課題の重要性と意義を再認識しました。

阪神の史料ネットでは、組織改革論ともリンクさせながら、今後も、山陰や芸予の活動を支援し、各地域での活動の発展と連携の強化をはかっていきたいと考えています。その意味で山陰・芸予、そして阪神のメンバーが一同に会して意見交換を行った今回の例会は、今後の活動にとって大きな画期をなすものとなるでしょう。

（さがあした、桃山学院大学専任講師）

大阪歴科協７月例会に参加して

吉　川　　潤

今回、大阪歴史科学協議会の７月例会に参加して、今まで知らなかった各地での史料ネット（資料ネット）の取組みについて、詳しく知ることができたと思います。

まず小林准士氏の報告では、山陰で救出された史料の内容について、いくつかに分けて報告されましたが、その内では特に襖など廃棄史料の集蔵物体の重要性が注目されました。小林氏によると、今回特に多く救出された史料は襖の下張り文書で、また山陰地域は一般に古文書類の所蔵が少ないため、相対的にそれら襖の下張り文書の価値が高くなる、とされています。しかし同時に襖類は、救出後の解体・保存などの処置が難しいだけでなく、緊急的に預かったものをどう扱うか、といった問題点を伴うことも指摘されました。確かに襖類は、他の救出史料と違って、そこから下張り文書を剥すという、保存・活用のための特別な処置が必要で、また震災直後という状況で預かった襖類を解体するには、下張り文書を剥してしまう前に、所有者の方の意向や所有権などを確認しなければならないと思います。

報告後の討議でも、この預かっている史料の所有権や返還手続きについて、改めて議論がありましたが、その問題の重要性について私自身は、襖の問題と絡めて大変納得しながら聞かせていただきました。さらにこの所有権の問題については、史料全体に渡っても、文書による確認の必要など、考えなければならない点が多いと感じました。

次に寺内浩氏の報告では、今治で救出活動を始めた当初は、広報で呼びかけても、史料所蔵者の方からの史料救出の依頼は少なかったこと、その後、史料とはどんなものかと説明しながら、実際に被災地域を廻っていく中で、所蔵者の方から「そういう品でしたらウチにも…」という風に、史料の存在を確認できたことなどが述べられました。寺内氏によると、特に近代の史料が、文化財として認識されていないということでしたが、これら一般に文化財と認識されていない史料の掘り起こしは、効率的な史料救出活動をしていく上でも、今後重要になってくる問題だと、私は感じました。

また救出史料の内容については、教育関連史料で戦前の子供の宿題「夏休みの友」が見つかった話などは、大変興味深く聞かせていただきました。

今回は報告のほかに、実際に史料救出で使う様々な道具の紹介などもあり、襖の外枠を外すのに使う襖バールなど、普段見ることのない道具なども見せてもらい、救出活動の実態についても、非常に勉強になりました。

（関西大学大学院修士課程）

◇兵庫津研究会（第３回）のお知らせ　　連絡・問合せ先　歴史資料ネットワーク

兵庫津を臨終の地に選んだ一遍の墓石（五輪塔）の造立時期や、石工の系譜、造立主体の「在地の輩」についてご報告いただきます。兵庫津の寺院についてのコメントとあわせて、中世の交通・信仰・技術について意見交流をおこないます。

日時：10月６日(土)午後１時～４時30分　会場：兵庫勤労市民センター(JR兵庫駅北東徒歩３分)
報告：「一遍の墓は誰がたてたのか」山川 均（大和郡山市教育委員会）
コメント：「兵庫津における律宗と時宗」森田 竜雄（神戸大学）
＊研究会終了後、希望者による現地見学会を予定しています。

◇「火垂るの墓を歩く会」成功裏に終わる

前号でお知らせした、実行委員会主催による「火垂るの墓を歩く会」の第３回目も、多くのボランティアの皆さんの協力のもと、無事成功裏に終えることができました。

史料ネットの協力によって毎年夏に開催しているこの企画ですが、定員50人に対して申込みがはるかに多く、昨年、一昨年は申し込まれた方からのクレームもありました。そこで今年は、８月５日（日）と７日（火）の２回、いずれもほぼ同じ内容で実施し、申し込み者全員に参加していただくことができました。今年の参加人数は、５日が約60人、７日が約50人（いずれもボランティアスタッフ、マスコミ取材等含む）でした。

３回目となる今年は、御影周辺のコースを歩きました。阪神御影駅に集合し、周辺の史跡なども見学しながら、石屋川公園へ。ここには、震災後設置された「火垂るの墓」の一場面を描いたモニュメントがあります。ここから、アニメにも登場する御影公会堂へ。ここでは、公会堂そのものの歴史や文化財的価値も含めて、５日は川島智生さん、７日は西村豪さんに解説していただきました。

ここから、講演・説明会場となる御影高校へ。企画の趣旨をご理解いただいた御影高校の先生方の協力で、冷房の利いた視聴覚室を使わせていただくことができました。荒木潔さんと、森紀太雄さんという、お二人の体験者から空襲体験をお聞きし（森さんは５日のみ）、さらに実行委員会代表の正岡茂明さんや、神戸空襲を記録する会代表の中田政子さんからの説明やお話がありました。７日には、昨年夏の課題学習で、「火垂るの墓」に登場する場所の文学散歩をとりあげた鳴尾高校の生徒二人も参加して、自分たちが調べた成果を発表してくれました。

この後、ふたたび暑いなかを歩いて成徳小学校へ。ここは、小説やアニメには学校名は明記されていませんが、筆者の野坂昭如氏が通い、小説中二人の兄妹の母親が被爆して収容された学校のモデルと考えられている場所です。そこからＪＲ六甲道まで歩いて解散しました。

当日の参加者の感想文からは、内容への厳しい注文の声もありましたが、企画そのものについては例年どおり好評で、前回前々回の資料を入手したい、来年もぜひこの企画を続けて欲しい、来年も参加したいがどうすればよいか、と言った声が多く寄せられました。また、今年は参加できなかったが、資料だけでも送って欲しいと、史料ネット事務局に連絡してこられる方もありました。

また、７日には神戸新聞、読売テレビ、阪神シティケーブルという三社の取材があり、いずれも大きく取りあげていただきました。この報道を見て、質問や協力依頼ということで、史料ネットや実行委員会に連絡してこられた方も数件ありました。

このように、すっかり定着し、小説の舞台や背景に関わる情報も徐々に蓄積されてきていますので、実行委員会としては引き続き史料ネットや神戸空襲を記録する会との連携のもと、この企画を継続・発展させていきたいということです。神戸空襲を記録する会と「火垂るの墓を歩く会」の間では、戦争関係の情報データベースづくりなどの共同作業のプランもあり、こういった市民の取り組みのなかで、戦争の歴史が掘り起こされ、今の世代や次の世代に、その意味が伝えられていくことが期待されます。

＊＊
☆このニュースは、ＮＩＦＴＹ－Ｓｅｒｖｅの歴史フォーラム・歴史館２番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。
★史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
http://www.archivists.com/ または http://member.nifty.ne.jp/archivists/
または http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/
＊＊

史料ネット NEWS LETTER No. 26　　2001.９.10（月）
編集・発行　歴史資料ネットワーク　〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565　e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp
URL：http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/welcome.html